

## 愛情のユートピアから情欲と狂気のディストピアへ —「解嚴」前後における蘇偉貞の眷村表象—

倉本 知明

- 第1節 純愛と純潔、初期作品におけるその特徴  
 第2節 愛と青春のユートピア—『有縁千里』（1984年）  
 第3節 情欲と狂気溢れるディストピア—『離開同方』（1990年）—  
 おわりに

### （要約）

1987年の「解嚴」後、民主化運動と台湾人意識の高揚する社会情勢を背景に、眷村出身の作家たちが描く小説からは眷村にある種のユートピア的な空間として描き出そうといった従来の眷村表象は急速に後退し始めていた。「閩秀文学」の流行期を通じて少女たちの「純潔性」に至高の価値を置き、多くの恋愛小説を描いてきた蘇偉貞もまた当時そうした叙述方法に転換を迫られた作家の一人であった。「解嚴」後、蘇偉貞は積極的にテキスト内部に情欲や狂気にとりつかれた人物たちを登場させることで、それまで自身の叙述の根幹でもあった「純潔性」といった概念を破壊していった作家であったといえるが、彼女の「性」をめぐるこうした叙述様式の転換は従来ユートピア的な空間として描かれてきた眷村表象に果たしてどのような変容をもたらす事となったのか。本稿では「解嚴」前後に描かれた蘇偉貞の『有縁千里』（1984年）と『離開同方』（1990年）というふたつの眷村小説を取り上げることで、こうしたジェンダー表象と眷村表象の連動性の持つ意義について考察してみたい。

### 第1節 純潔と純愛、初期作品におけるその特徴

1954年、蘇偉貞は台南市の804医院（日本統治期に建設された元陸軍病院。現在の成功大学力行キャンパス）で生まれた。彼女の父、蘇剛（本名；蘇富剛）は、日中戦争の勃発に伴って18歳で広州中央軍校の歩兵科に入隊、戦線の拡大に伴って昆明、成都などを転戦した後、1949年の国民党政府の台北遷都とともに台南の砲兵学校の軍事教官として台湾へと赴任してきた国民党軍人であった。一方、貴州の戦線で父蘇剛と出会い、戦時下に長男を出産した母、陳潔姍（本名；陳順男）は、1951年に中国本土が完全に共産党政権の手に落ちた後、「八方手を尽くして家財と長男を連れ」、「長男を脇に抱え、荷物を引き摺りながら」台湾へと逃れてきた当時200万人にも上るとも言われた避難民の一人だった<sup>1</sup>。

父蘇剛の姓を継ぎ、広東省番禺を本籍とする蘇偉貞は、台南県永康市網寮の眷村影劇三村で高校卒業までを過ごし、1972年に台北郊外の国民革命軍政治作戦学校（現在の政治作戦学院）演劇科に進学するまでのおよそ18年間をこの台南郊外の眷村で過ごすこととなった。多くの眷村出身の作家たちが自身の初期作品に残る反共・愛国的な息遣いを眷村生活での名残であると述懐するように、戒嚴令体制下の台湾において「反共復国」の前線基地としての役割を担ってきた眷村での暮らしは、後に蘇偉貞自身が認めるように彼女の国家観や民族的アイデンティティに大きな影響を与えることとなった。蘇偉貞は当時の自身と国民党の関係に関するインタビューに対し、次のように応えている。

私に国民党を認めないでいることなど出来たでしょうか？ 私にもこうした国家意識は比較的はつきりしていました。まだ政治がどういったものかも知らなかった私や同年代の眷村子弟たちでさえ、自分たちが「国民党人」であるということをはつきりと理解していました。父は国民党員であり、母もまた言わずもがなでした。毎日出会うあらゆる人の顔にそうしたある種の党色といったものがくつきりと現れており、それが私たちにとって全ての世界でした。私たちの世代にはそうした雰囲気の影響が深く刻み込まれているのです<sup>2</sup>。

あらゆる人の顔に「党色」といったものが浮かび上がっていた世界において思春期を過ごした蘇偉貞にとって、反共意識と国民党への同一化はある意味で必然的な思想形成の結果でもあった<sup>3</sup>。高校卒業後に彼女が士官候補生を養成するための政治作戦学校へ進学したことも、そうした眷村独特の愛国的雰囲気が背景にあったものと思われる<sup>4</sup>。4年間の軍事教育に加え、8年にも及ぶ軍歴を経験した蘇偉貞は在軍中より「国軍文藝小説奨」を相次いで受賞するなど「軍中作家」としての一面を持つ傍ら、『陪他一段（彼に寄り添って）』、『紅顔己老（老いたる麗人）』、『世間女子（世間の女性）』など、その独特な作風で以って男女間の情愛を描いたことによって、当時文壇を風靡していた「閩秀作家」の一人として大いに世間の注目を集める事となった。

1980年代初頭の台湾文壇では、朱天文、朱天心、蔣曉雲、袁瓊瓊、蕭麗紅など、主に10代から20代の女性作家たちの台頭が際立ち、彼女たちの作品群は当時「閩秀文学」の名で呼ばれ、社会全体の大きな関心と話題を呼んでいた。こうした若い女性作家をその書き手とした「閩秀文学」は、それまで男性文学の中では看過されがちであった女性の恋愛や情愛をテーマとした小説を描いたことによって、1980年代初期における台湾文壇を席卷する事となったが、そうした「閩秀文学」の流行の背景には、邱貴芬の指摘するように、社会の発展に伴って小説を読むような中産階級層の女性たちが急増してゆく中で、恋愛や婚姻といった問題を女性の視点から描いた作品が一定の支持と市場を形成していた事がその要因として上げられる<sup>5</sup>。1976年、短篇小説『陪他一段』によって若干22才の若さで作家としてデビューした蘇偉貞の初期作品の多くも、こうした同時代に文壇に登場してきた「閩秀作家」たちと同様に若い女性たちの情愛を描くいわゆる恋愛小説ものが大半を占めていたといえるが、その独特の文体は「冷筆を以って熱情を描き出すその様は、女性たちが愛欲生死の狭間を転々とする陰鬱で苛烈な状況を描き出すもの」<sup>6</sup>と高く評され、「閩秀文学」の流行期を通じて女性を中心とした多くの読者を獲得する事となったのだった。

例えばその代表的な作品として、蘇偉貞の初期代表作の一つでもある中編小説『紅顔己老』(1980年)のヒロイン章惜ジャンシーの存在があげられる。海外への留学経験を持つ章惜は泥沼に咲く蓮花のように強く清らかな性格を持ちながら、妻帯者である大学教授余書林ユシュリンとの間に秘かに愛を育み、実る事のないその恋に苦悩し続ける女性としてテキストに登場する。章惜と余書林との間には常に傾慕にも似た熱情が張り巡らされながらも、結局はその垣根を越えることは叶わず、章惜は失意の下ひとり故郷の台南へと帰郷してしまうのだ。彼女のこうした愛情はあくまでも精神的なものであり、「彼らの間には肉体的な抱擁や接触は必要なく、精神的な交流」<sup>7</sup>のみが強調されてきた。そのため「理性によって抑えられた愛は、読む者に感動を与える」<sup>8</sup>ものと高く評され、その作風

は当時多くの支持と称賛の声を得てきたのだ<sup>9</sup>。

自らの人生を投げ打ってでも自身の愛情を守りぬこうとする章惜のような女性たちの姿は、さながら己の信念と理想に忠実な兵士たちのようでもあり、王徳威は蘇偉貞の描くこうした女性たちを「沈黙の喧騒の中で激情の規律を鍛えぬいた」「行軍者」たちと呼び現している<sup>10</sup>。愛のために全てを投げうつうら若き乙女たちの果敢かつ悲壮な姿は、確かに愛情のユートピアを守るために造型された彼女の忠実な兵士たちであったといえる。

こうした作品を見ても分かるように、蘇偉貞はしばしばテキスト内に清らかで芯の強い女性たちを登場させ、そこに絶対的な「純潔性」を付与するといった叙述法を取ることで作品全体にある種独特の「潔癖さ」を与えてきた<sup>11</sup>。蘇偉貞の初期作品に共通するのは、女性たちの持つ情の深さや運命の異性へ捧げる研ぎ澄まされた純粋な愛であり、そこで語られる愛情では常に精神的なつながりが重視され、肉体的なつながりは極力排除されてきたのだ。

女性の身体とそこに内在する情欲を忌避することによって男女間の純粋な情愛の形を描き続けた蘇偉貞は、異性間における肉体関係に関して「書けないのではなく、人と人の間の肉体行為といったものを避けてきただけ」だと述べ、「それが『道徳』上、厳粛なもの」であったと後に自身のテキストにおいて「性」が存在していなかった事を認めている<sup>12</sup>。

しかし、蘇偉貞の描くこうした女性たちの「純潔性」は「解嚴」後、急速に崩れ始める事となる。章惜のような高潔かつ蒼白な麗人たちはテキストからその姿を消し、代わって登場したのが処女性と異性への幻想を打ち破られ、己の肉体に潜む情欲や狂気といった制御不可能な感情と向かい合うこととなった女たちのうちひしがれた姿であったのだ。結論をやや先取りしていえば、「解嚴」を跨いで起こった蘇偉貞のこうした叙述様式の急速な転換は、1980年代における「政治文学」の台頭と「閩秀文学」全体の地盤沈下を背景としたものであると同時に、かつて「国民党人」であったという蘇偉貞がそれまで自らのテキストにおいて金科玉条としてきた「純潔性」に潜む政治性をあぶり出すための試みであったといえる。そのことは、言葉を換えれば「解嚴」以降、情欲や狂気といった概念を積極的に自らの作品世界に取り入れていった蘇偉貞が、それまで自らの叙述の根幹であった「純潔性」を破壊することによって、女性の身体を管理するものであった「純潔性」とそれを支えてきた「家庭」、そしてその集合体としての眷村といった社会空間を批判的に捉え直すための試みであったともいえる。

それでは、「解嚴」を挟んだ彼女の叙述には、具体的にどのような変化が起こったのであろうか。以下では「解嚴」前後に描かれた二つの眷村小説を比較することで、こうした蘇偉貞の性と眷村をめぐる叙述転換の意味を明らかにしてみたい。

## 第2節 愛と青春のユートピア—『有縁千里（めぐり逢い）』（1984年）

1949年、国共内戦に敗北した国民党政府は首都を南京から台北へと遷し、それに伴って当時200万人とも言われた敗残兵と難民たちの波が陸続と台湾海峡を越え台湾本島へと押し寄せてきていた。国民党政府はこうした人々を一元的に収容・管理する目的から、台湾各地に点在する日

本統治時代の軍事施設跡地や新たに大陸反攻用に建設された軍事拠点などを中心に、これらの人々の居住問題の解決を図ろうとした。後に眷村と呼ばれるそれら官営の村落集合体は、国民党政府や陸・海・空各軍の管轄のもとで「反共復国の模範村」として政府の重要な政治基盤を形成する一方、台湾社会から隔絶され、中国各地の言語・文化・民族が融合したその特殊な背景から、「眷村文化」ともいうべき独自の文化を後に生み出してゆくこととなっていった。

1984年に発表された長編小説『有縁千里』は、そんな眷村で青春時代を過ごした蘇偉貞にとって、初めて眷村を本格的に小説のテーマとした作品であった。物語は1950年代の台湾南部の地方都市、東港付近の眷村「致遠新村」で暮らす高奥・柴敬荘夫婦とその四人の兄弟妹たちの成長物語を中心とした青春群像劇として描かれている。作中には豆炭の煙に涙を滲ませながらお隣の奥様方と情報を交換し合う母親たちや毎日広場に停まる軍用ジープに乗って学校へ向かう子供たち、食事の後にきまって腰かけ椅子を持って村の入り口に集まっては日暮れ近くまでお喋りを続ける老人たちなど、当時外部からはうかがい知れることの出来なかった眷村内部の日常生活やそこに暮らす人々の心情などが細やかなタッチで描き込まれている<sup>13</sup>。複数の人物たちの視点が交錯する形で進行してゆく『有縁千里』において、愛情は作品全体に通底するテーマとして描かれているといえるが、ここでは主に二人の女性に焦点を当てることでその特徴を明らかにしてみたい。

### 1. 趙致潜—悲劇のヒロインとその「純潔性」—

多くの眷村小説がそこで暮らす女性や子供たちの視点によって物語が綴られているように、『有縁千里』も女性や子供たちがその叙述の中心となっているといえる。軍人とその家族たちを安置するために台湾各地に建設された眷村はしばしば男性中心の空間として想像されがちだが、実際には基地勤めや長期間に渡る離島勤務などで家を留守にしがちな夫たちに代わって家を切り盛りしていたのは家庭を預かる女性たちであった。そのため、眷村は軍人を家長とする家父長的な家族形態を維持しつつも、同時に女性や子供たちによってこそ代表され得るような空間でもあったといえる。

「解嚴」以前の蘇偉貞の作品に多く共通してみられるように、『有縁千里』においても作品全体にある種の純潔のイメージを与えるような清らかで芯の強いタイプの女性が登場している。純情や清純を体現するこうしたヒロインたちは、しばしば一途に相手を想うあまりに婚姻制度や社会階級などの壁に突き当たり、悲劇的な結末を迎える存在として描かれることが多いが、趙致潜はまさにそうしたタイプの女性として物語に登場している。

かつて大陸の大学に留学していた台南名家の子息林紹唐は、南京で出会った国民党将校の兄を持つ趙致潜と将来を約束する深い仲となるが、大陸が共産党政権の手に落ちた後、一家揃って台湾へと逃れてきた致潜に対して紹唐は母親の反対もあり、中々結婚へと踏み切る事が出来ずにいた。煮え切らない態度を続ける紹唐に対して、致遠新村で暮らす致潜は彼の心に乞食同然に台湾へと流れてきた自分たち外省人に対する嫌悪感のようなものを感じ取り、「わたしが台湾へとやって来たことに選択の余地なんてなかったの」と自身の境遇と紹唐の愛に絶望を感じ始める。しか

し、それでも紹唐の往時の愛情を信じる致潜は、二人の交際を認めてもらうために台南にある紹唐の実家へと足を運ぶ。巨大な封建的家族制度の下で林家を一手に取り仕切る紹唐の母親は、紹唐と外省人である致潜の交際を認めず、代わりに日本から帰国してきたばかりの陳玉如<sup>チェンユール</sup>を妻に娶るよう紹唐に申しつける。致潜は二人の交際の許しを得るために紹唐の母親を前に一昼夜跪き続けるが、結局二人の交際は認められることなく、致潜は一人致遠新村へと帰郷し、残った人生を紹唐の幻影と過ごすこととなる。

近代家族制度の発展とともに生まれた「愛－性－結婚」という三位一体のロマンチック・ラブ・イデオロギーの背景には、真の愛の対象は世界にただ一人であること、そしてその愛の対象である配偶者は利害関係や物質的条件からではなく、自らの愛にのみ忠実に選択すべきであるといった信念が隠されているといえるが、戦乱の大陸で生まれた愛を信じて自身が難民となって台湾へとやって来た後もこうした運命の愛を信じて果敢に行動する致潜は、配偶者の選択権を封建的家族制度の下で奪われてしまっている紹唐とは対照的な存在として描かれている。台南一帯の土地を所有する林家という封建的な家族制度の存在は、致潜と紹唐の純粋な愛情を阻害する巨大な壁となって二人の前に立ちはだかるが、母の命令で玉如を娶ることとなった紹唐と違い、運命の異性を想い続けるあまりに寡婦のような生活を敢えて続ける致潜は、まさにこうしたロマンチック・ラブ・イデオロギーにおける信念とそれが孕む悲劇を見事なまでに体現した存在であるといえる。紹唐との愛を守るために寡婦の如き生活を続けようとする致潜は自らの愛情の在り方にどこまでも忠実であるが、皮肉にもそうした「純潔性」によって致潜は自らの青春に早々と幕を下ろしてしまうこととなる。致遠新村はそんな傷ついた致潜を優しく迎え入れてくれる場所として描かれており、眷村は女性たちにとって愛と純潔のユートピアを守るためのある種の避難場所としても機能しているのだ。

一方、二人のこうした恋愛模様は、台湾社会に亀裂を生んできた省籍問題としても読み取ることが出来る。1950年代初頭、日本統治の影響が色濃く残る台湾の地方都市において「乞食同然に」大陸から流れてきた致潜よりも、「日本的なものを全てを移植したような」「上品さ」を併せ持つ玉如は、代々子息を日本へ輩出してきた林家にとってははるかに名誉ある事であった。致遠新村の人間たちも、「土地も財産も親しい人間も全て失」ってしまい、「孤児」同然となってしまった自分たちに比べ、土地の人間たちがはるかに豊かな生活をしていることに羨望の眼差しを向け、致潜と紹唐の交際に並々ならぬ関心を寄せている。そのため、紹唐の叔母である宝蓮<sup>パオリエン</sup>も紹唐の恋人が外省人である事を知り、分別のつかない甥が日本への留学をしなかったことがそもそもの間違いであったと二人の交際に反対する。また夫が日本兵に打ち殺されたという経験を持つ紹唐の母親も、日本的な容姿と性格を持ち合わせた玉如を息子の嫁として認めるが、外省人に対しては深い嫌悪感を持つ存在として描かれている。自由恋愛が禁じられた封建的な家族制度の背後には、日本の植民地時代を経験した本省人家庭の奇妙な日本崇拜と中国人に対する生理的な嫌悪感が隠されており、そこにはこうした本省人社会に内在する植民地経験の傷跡とそれによって生じた台湾社会内部の対立の構図も読み取ることが出来る。

## 2. 柴敬莊—眷村における良妻賢母—

『有縁千里』におけるもう一人の中心的人物として、国民党軍の将校高奥<sup>ガオアオ</sup>の妻であり、また高方<sup>ガオファン</sup>、高重<sup>ガオジョン</sup>、高意<sup>ガオイ</sup>、高嶺<sup>ガオリン</sup>の四兄弟の母でもある柴敬莊<sup>ツァイジンチュアン</sup>の存在があげられる。渡台前には南京の金陵女子大学（現在の南京大学）で高等教育を受けたという敬莊は、致遠新村に腰を落ち着けてからは夫に対しては良き妻であり、また息子たちに対しては教育熱心な良き母として一家を切り盛りしてゆくまさに良妻賢母型の女性として描かれている。彼女が教育を受けたという金陵女子大学は、抗日戦争の影響から1937年にはキャンパスを一時的に四川省成都へと移しており、四川出身の空軍中佐であった夫とはおそらくその時期に成都で出会い、恋愛結婚したものと思われる。そのため、同時期に戦乱の大陸で出会いながらも結局は夫婦として結ばれる事なかった致潜・紹唐とは対照的に、二人は「愛—性—結婚」というロマンチック・ラブ・イデオロギーにおける三位一体の形を見事に体現したカップルとして描かれている。高夫婦は異郷の地で生活する上でお互いを助け、励まし合い、直面する幾多の困難を乗り越えてゆく。彼らは子供の成長を何よりも重視しており、テキスト内においてまさに模範的な家庭像を維持している。

「高方に弟と妹を連れて行かせよう。幸せになれるかどうかはあいつら次第だ。自立することを少しは学ばせなくちゃならない」

「おせっかいね。高重は元気が有り余っているし、高意は恥ずかしがり屋よ。二人を連れて行かせるなんて無理な話。私が送って行くから、あなたは心配しないで」

「それじゃ、高方の宿題は君が面倒を見てやれよ。あの子は頭はいいが、何しろ遊び癖がある。育て方次第じゃ、将来君に迷惑をかけちまうことになるぞ」

「あなたがしっかり父親を務めていてくれてさえいれば、子供はちゃんと成長しますよ。今は昔と違って子供を褒めちぎる人なんていないんですからね。子供がうまく成長しないのは、きっとその家全体の責任なのよ。私たちだって他人の事なんかには構っていられないし、他人だって私たちのことなんか構ってくれる余裕なんてないんですから」

「分かってるよ。俺たちポンコツの時代がもうとうに過ぎちまってるってことぐらい。ああ、やつらは俺にとってたった一つの身内だ！」高奥はそう言い残すと部屋に戻ってそのまま眠りに就いた。

敬莊はその時になって初めて夫が半ズボンを着ていたことに気がついた。誰も気に留めなかったのだろうか。人の注意はその人の着ているものへと注がれるものだ。彼女は夫の通り過ぎて行った道を呆然と眺めつつ、ひとり言のように呟いた。「蚊が多いわ。お金を貯めて、せめてあの人に長ズボンを縫ってあげなくちゃ」<sup>14</sup>

ヴィクトリア朝時代に生まれ、後に世界各国に波及したという近代的ロマンチック・ラブの背景には、常に「清潔なる男女交際」とそれに基づく「恋愛結婚」を通じて「家庭」（ホーム）が出来上がるというロジックが働いているが<sup>15</sup>、戒厳令体制下の台湾において、「家庭」は「反共復国」という国家的事業を成し遂げるための兵士と労働力を再生産する拠点として常に重要な位置を占

め始めていた<sup>16</sup>。「反共抗ソは家庭から」というスローガンの下、女性たちには「家庭」と国家をつなぐ仲介者としての機能が負わされ、とりわけ「反共復国の模範村」とされてきた眷村の母親たちには当然軍人である夫を助け、「民族意識」と「反共主義」に富んだ次代を教育するという壮大な任務が課せられていた。

物語において、致潜の義姉であり、また英国留学経験もあるという朱雅博<sup>チュヤーポー</sup>は、年少の敬荘に対して「家事、村事、国事、この三つは切り離すことが出来ないのよ」と静かに言い諭してみせる。戒厳令体制下、国民党政府の「鉄票区」として政府の徹底的な統制下にあった眷村は、まさに間接的に戒厳令体制下の国家組織をその底辺において支えるものであった。「家庭」の集合体が眷村を形成し、その眷村が国家を支えるといった構図は、国家を根本の部分で支えているものが「家庭」の女性たちであるという論理を生み出し、「家庭」の中心にあった主婦たちには当然のこととして「良妻賢母」であることが求められてきたのだった。

当時、女性の戦時動員体制への協力を唱えて創設された「中華婦女反共抗ソ聯合会」（以下、婦聯会）が発行していた月刊雑誌「中華婦女」において、「家庭」における女性の役割とその重要性は次のように強調されている。

我々が切望する強盛国家を築くためにも、まずは良好な家庭を築くべきでしょう。女性はまさに家庭の中心的存在であり、良好な家庭を築きたければ、教育の力で以って女性の責任感を育成すべきです。とりわけ戦禍の蔓延するこの動乱の時代にあつて、女性は普通の食事や裁縫、家事及び育児などの常識を知るだけではなく、重要なのは教育によって広い視野を育成し、民族意識を育て上げることでありましょう<sup>17</sup>。

また「家庭」において女性が果たすべき役割は、軍事的見地から次のように語られている。

今日台湾にある者にとって最も切望することは反共抗ソを成し遂げ、大陸の失地を回復することです。しかしこの偉大な任務は口先だけでどうにかなるものではありませんし、また我々が陸海空軍や同盟各国の協力のみでなせるものではなく、一切は我々自身の双肩にかかっているのです。このような激しい時代の流れの中にあつて、我々婦女は如何に行動すべきでありましょうか？ 私が思うに、最も有効な方法はまず家庭から始める事です。なぜなら家庭は社会の基本組織であり、もし家庭を作戦単位とするならば、主婦はその指揮官として政府の作戦戦略に合わせ、強固な陣地を構築することが出来るからです。これが反共抗ソを為す最も確かな方法でありましょう<sup>18</sup>。

こうした一連の言説を見ても分かる様に、当時「家庭」は国家的事業（反共抗ソ）を遂行するための「作戦単位」とされ、その中心的存在であった主婦たちにはその「指揮官」として社会全体に巨大な「戦陣」を構築することが求められていた<sup>19</sup>。「軍人服務」をその使命として発足した婦聯会は、冷戦体制が固定化する1950年代から積極的に眷村の建設を手掛けるようになるが、

愛国心の高揚と戦時体制確立のために「良妻賢母」を量産するといった婦聯会のイデオロギーは、ある意味でその庇護下にあった眷村内部の家庭に最も強く浸透していたといえる<sup>20</sup>。

『有縁千里』において「良妻賢母」を象徴する存在であった敬荘は、家庭内の出来事だけにとどまらず、眷村内部の家庭問題や諍いなどにも積極的に調停者としての役割を果たしている。時には紹唐との恋に悩む致潜の相談役となり、また時には「長官夫人」として、隣家の老兵が貧しさのあまり子供を墮胎しようとするのを止める様に説得したりと、まさに三面六臂の活躍をしているといえる。しかし物語の後半、子供たちの成長に随って敬荘の影がテキストから急速に薄くなってゆくことは、「老いては子に従え」という言葉通り、女性の情愛のユートピアを描いてきた蘇偉貞自身が「家庭」における女性の役割にひどく忠実であったことを伺わせるものとなっている。

国民を労働者や兵士として肉体的・精神的に動員し、生命と労働力の再生産を通じて国民の統合を図るためにも、近代国家にとって性とそのモラルの管理は常に重要な課題であった。その点で、テキストにおいて「純潔性」といったモラルを信奉し、純情や清純さといったイメージを体現する致潜も、「良妻賢母」として「家庭」を切り盛りしてゆく敬荘も、こうした女性の身体のレベルに生じた国民化とその抑圧の洗礼を等しく受けていた。打算や邪念のない異性愛や家族愛が重なり逢う世界としての眷村像は、戒厳令国家によって生み出され保障された情愛のユートピアであり、「解嚴」以前に「国民党人」であったという蘇偉貞は、まさにこうした純潔性に孕まれた政治性にある意味で無邪気に寄り添っていたといえる。

### 第3節 情欲と狂気溢れるディストピア—『離開同方（故郷はるかに）』（1990年）—

1980年代の台湾社会は、民進党の結成に戒厳令の解除、大陸の親族訪問解禁、蔣経国の逝去とそれに続く李登輝の中華民国総統就任など、重大な政治事件が新聞の誌面をかざらない日はなかった。こうした状況の中で、眷村出身の作家たちによって描かれていた眷村小説もまた急激な変容を遂げ始めることとなっていた。「解嚴」直後から執筆を始め、『有縁千里』の6年後に刊行された蘇偉貞の長編小説『離開同方』（1990年）は、『有縁千里』と同様に眷村を舞台とした群像劇でありながら、そこには敬荘が体現していたような良妻賢母型の母親たちは姿を消し、眷村は精神の平衡を失った者たちの喧騒に溢れた、狂気と情欲に満ち満ちたディストピアとして描かれている。

物語の語り手である中年男性の「わたし」(奉磊<sup>フォンレイ</sup>)は、かつて少年時代を過ごした嘉南平野に広がる117高地の眷村「同方新村」(同方新村<sup>トフワンシンツン</sup>)に母の遺骨を持って訪ねるが、高速道路によって二分されてしまった村には往時のような生命力は既に失われて久しい。「わたし」は「将来、もし自分が死ねば同方新村に戻りたい」という母の遺言を守って、その遺骨を同方新村へと持ち帰り埋葬する。「父の転職に随って、爾後わたしたちは北へ南へと移動を繰り返したが、一つとして同じ場所に三年以上腰を落ち着けたことはなかった」と回想する「わたし」は、幼少時代の記憶が到る処に



満ちた同方新村を「故郷のようなものだった」と語り、母親の遺骨を彼の地へと返す「帰郷の儀式」を執り行うことから物語を語り始める。

わたしは骨壺を膝の上に高く抱きかかえると、それを窓際へと寄せ、それからそれを正面へと向け直した。これで母の顔も同方新村と向き合うことが出来ただろう。わたしはきつく母の骨壺を抱きかかえたままジッと正面の画面に見入っていた。ほんの一時して、わたしは小さく母の遺骨にささやきかけた。「母さん。ほら、ぼくたち帰って来たんだよ」わたしのその声に応じるかのように、空からは土砂降りの雨が降って来た。それはまるで異郷の地で逝ってしまった死者たちが、親しいものたちの招き声を聞いたその瞬間、血と涙で以ってその声に応えたかのようなようだった<sup>21</sup>。

『有縁千里』において、眷村の外の世界へと飛び出していった少年たちが未来への希望を語ることによって物語を終えている事とは対照的に、『離開同方』では時間はむしろ現在から過去へと延びている。眷村の外の世界から数十年の時を経て「帰郷」を果たすこととなった「わたし」は眷村を名実ともに「故郷」として認識するものの、その心にはすでに明るい希望や未来への展望といったものは存在しない。しかもその「故郷」は高速道路の開通によって既に半身不随に陥っており、「わたし」は母の冥府からの声である雨音とともに一年中雨の降りやむ事のなかったという生命力に溢れた往年の同方新村の過去へと遡ってゆくことで、眼前の無残な光景から目を逸らし続けるしかないのだ。

雨音とともに想起され、モンタージュ形式に想起されてゆくそうした過去の断片はひどく幻想的であると同時に、ある意味で不気味な様相をも呈している。眷村出身の作家である張大春は、『離開同方』におけるその不可思議で残酷な過去によって成り立った世界観を、ガブリエル・ガルシア＝マルケスの『百年の孤独』における蜃気楼の村マコンドに例えているが<sup>22</sup>、村人たちの情欲と狂気の騒乱状態の中で滅びの道を歩んでいった同方新村は、むしろ過度の情欲によって神に滅ぼされた罪悪の都市ソドムとゴモラといった方が適切といえるかもしれない。こうした眷村表象の転換が生まれた背景を探るためにも、ここでは前節と同様、複数の女性に焦点を当てることでその変容の持つ意味を探ってみることにしたい。

### 1. <sup>ファンジンシン</sup>方景心—汚れた「純潔性」と「家庭」の崩壊—

もちろん、ディストピアにも純愛は花開く。風貌秀美にして成績優秀な女学生であった<sup>ファンジンシン</sup>方景心は、将来を有望視される村の模範学生として長らく両親自慢の一人娘であったが、父の同僚である若い軍人、余蓬と恋を語り合う仲になってから、彼女の人生の歯車は徐々に狂い始める。財産も家族も失い、ひとり台湾へと流れてきた貧しい青年軍人、余蓬と娘との関係に反対する<sup>ファンマ</sup>方媽（「媽媽」は母親の意）は、物語において執拗に二人の関係を阻害する役どころを作者から与えられている。

「わたし」の回想する同方新村の過去は、どれも悲愴な色彩を帯びているといえるが、そんな「わ

たし」が真っ先に思い出したのは、117高地の眼下に広がるサトウキビ畑の火災だった。失火によって低地のサトウキビ畑が全焼した際、焼け跡から二体の身元不明の焼死体が発見されるが、その焼死体の内一体が身重の女性であった事に加え、景心と余蓬の二人が村から姿を消したという偶然が重なり、村人たちは余蓬との交際を許されなかった景心が傷心のあまり心中自殺を図ったのだと思ひ込んでしまう。しかし、その実二人は両親に知られぬようにひっそり村を出奔していたのだが、一人娘が自殺を図ったと知らされた方媽媽はすっかり気が触れてしまい、以後「礼砲のような叫び声で地を震わせ」続け、同方新村の村民たちの共有する痛みの記憶の一つとなる。

『有縁千里』において、<sup>チーチエン シャオタン</sup>致潜と紹唐の愛情を阻害する封建的な家族制度は本省人家庭の側に投影されていたが、『離開同方』においては両者の愛を引き裂くものはむしろ眷村内部の家庭制度に起因している。清朝時代の名家であったことに強烈な自負心を抱く方媽媽は方家の名誉を守ることに汲々とし、一人娘の景心をまるで家名をあげるための人形のように見なしている。

わたしの母が視線を方媽媽に向けると、二人は方家の客間へ移動して話を続けた。壁には方姉さんの表彰状が所狭しと並べ掛けられており、拡大した彼女の写真も飾られてあった。それはまるで個人用の博覧室のようだった。客間に掛かりきれない賞状の類は、方媽媽の部屋にまで掲げられてあった。おそらく彼女にとっては瞬きすることすら人生の栄誉であったに違いない。写真の中の方姉さんはただ静かな流し目でこちらを見つめていた。わたしの母は慎重になり過ぎぬように、「景心はいくつになったのかしら？ そろそろ嫁ぎ先の事も考えないと」

すると方媽媽はさも不興そうに、「まさか！ あの子には外国で博士様になってもらってようやくお祖父様にも顔向けできるってもよ」

「お祖父様？ まだ生きてらっしゃるの？ 台湾で？」母は首をかしげた。

方媽媽はわが意を得たりとばかりに胸を張ると、「もうとうに亡くなっているんだけどね。あの子のお祖父様は清王朝の翰林出身なのよ！ あの子の父親にはまるで芽がなかったけど、方家の名誉はあの子に全てかかっているんですよ」<sup>23</sup>

しかし、方媽媽のこうした強い期待と願望をまるで打ち壊すように、景心はその後両親に黙って高校を中退し、地位も名誉もない同じ村の軍人余蓬と駆け落ちしてしまう。景心は余蓬と結ばれるために彼と肉体的な関係を持ち計画的な妊娠を試みるが、一度目の妊娠では母親に見つかったり墮胎させられてしまうのだった。事情を調べるために軍から派遣されてきた監察官に対して、景心は臆することなく次のように供述している。

「今回の事は全て私が計画したことです。わたしは他の子たちよりも早熟で、女の身体がいつ頃排卵するのか自分でもよく分かっていました。その日に避妊しなければつまりは成功ってことでしょうか？ わたしたち二人はいつも一緒に居られたってわけじゃなかったんです」そして彼女は余蓬が彼女の想い人である事、そして彼と少しでも早く共に生活出来るよ

うにするために計画的に妊娠したことを告げると、得意そうに「余蓬はまるで聖人君子なんです。まるでわたしに触れたがろうとしないの！」と笑った。「もちろん、今は違うけど」<sup>24</sup>

うら若き「神聖かつ純潔な偶像」として同方新村の村人たちから畏怖と敬意の眼差しで見られていた景心は、こうして計画的妊娠という行為によって他者から与えられてきた「純潔性」を自らの手で汚し始める。「神聖かつ清純な偶像」という他者の視線は景心に良家の子女としての振る舞いを要求し、彼女を常に母親の自負心を満足させるための「博覧室」のような部屋へ閉じ込め続けてきた。こうした純潔性に付与された抑圧から逃れるためにも、景心は自らの固く閉ざされた貞操を打ち破り、余蓬との駆け落ちを試みたのであった。

そのため、妊娠を繰り返すようになってからの景心はそれまで母の言いつけを守っていた従順な娘から次第に自らの生き方を主体的に選ぶようになり始める。景心を妊娠させた事で外島勤務の懲罰を命じられた余蓬に会いに行くために深夜こっそりと寢床を抜け出した彼女の様子を、幼い「わたし」は神々しい思いで眺めることとなる。

方姉さんは舞台の上でその高貴で何者にも犯しがたい薄弱な身躯をスッと伸ばし、舞台の上に立ったその身体は容易に揺れ動きそうもなかった。そこに立ちつくした彼女の表情には、決して揺らぐ事のない強い決意が現れていた<sup>25</sup>。

テキストにおいて、性行為とそれに伴う妊娠は景心が自らの主体意識を確立して封建的な家族制度の頸木から抜け出すための契機として描かれている<sup>26</sup>。女性や子供たちによって占められた眷村は、一方で軍人を家長とした戦時動員を容易にするために造られた父権的、保守的な空間でもあった。「背の低い平屋はそれがどんな色をしているかにかかわらず、どこの家庭にも強く畏しい父権や保守的な気風が蔓延り、熱く押し掛かって」<sup>27</sup>いたという抑圧的な空間としての眷村は、そこから逸脱する女性たちにとってはある意味で牢獄として機能していたのだ。性的自己決定権を行使することによって、景心ははじめて母親によって奪われ管理されていた「性」を自らの身体へ取り戻す事に成功するが、しかし妊娠と出奔を繰り返したことで、景心は「家庭」と「故郷」の両方を同時に失ってしまう事となる。先に述べたように、景心の自殺を信じた方媽媽は気が触れ、後に全てを知った父からは親子関係を断絶されてしまう。荣誉に満ち溢れていたはずの方家の「家庭」は、こうして砂上の楼閣の如く、一瞬にして崩壊の憂き目に合ってしまうのであった。自らの「純潔性」を汚すことで「家庭」という檻を打ち破ろうとした景心は、その代償として同方新村という「故郷」から「離開（＝離脱）」することを自らに強いねばならなかったのだ。

この小説のタイトルである『離開同方』を日本語に直訳すれば、さしずめ「同方（新村）からの離脱」といった意味となるが、この「同方」に含まれた意義を如何に捉えるかによってこの小説の持つ意義は大きく変わってくるといえる。「同方」とは「解嚴」後の現在を生きる「わたし」が想い続けるような愛しい「故郷」であると同時に、「純潔性」とそこに内在されていた「父権」や「封建」といった概念をも暗示している。そうした意味で、紹唐への愛とともに自らの「純潔性」

を守りぬき、後に致遠新村の「家庭」へと回帰していった致潜とは違って、自らの肉体に生じた情欲に従って余蓬との間に肉体関係を持った景心は、彼女自身の身体を束縛してきた「家庭」から離脱することによって己の「純潔性」と決別し、またそうした「純潔性」を彼女に強いてきた同方新村からの離脱を果たしたのだといえる。つまり、景心の肉体に生じた情欲とは女性の「性」を女性自身の身体から切り離してきた「純潔性」というイデオロギーから離脱するための契機でもあったのだ。そして、こうした抑圧からの離脱こそが、テキストにおいて「純潔性」を担保する場所としての「家庭」や「眷村」を崩壊へと導く崩壊の序曲として描き出されているのだ。

## 2. 李媽媽 (田宝珣) / 全如意一狂気によって浮かび上がる「純潔性」という幻想—

同方新村には狂気にとりつかれた人物たちが実に数多く暮らしている。「床を洗った水で米が炊ける」ほど、身の周りのものを漂白状態に保とうと固執する段おじさん (段錦成) に、幼少期の熱病がもとで少年のまま大人になってしまい、後に父殺しの罪を負うこととなる瘋兄さん (「瘋」は気狂いの意)、娘が焼死したと思ひこみ、日がな一日獣のような咆哮をあげ続ける方媽媽など、一連の悲劇の連鎖は彼ら狂気に取りつかれた人物たちによってもたらされているといえる。こうした中でもとりわけ注意を引くのが、幼少時代の「わたし」の親友であった阿瘦の母、李媽媽 (田宝珣) の存在だ。

テキストにおいて、日がな一日「笑ってもいないのに笑っているような」表情を浮かべている李媽媽は、村中を徘徊しては出会った父親たちの胸についた軍人徽章を集めて回るといった精神病患者として登場する。抗日戦争中、軍に強制連行されて流亡学生たちの警護を命じられた阿瘦の父、李おじさん (李伯広) は、流亡学生たちの中にマラリアに罹った妊婦、李媽媽こと田宝珣を発見する。情緒不安定な田宝珣を李おじさんは懸命に介護するが、強姦されたとうわ言のように口にする彼女はその後も複数の男性たちと関係を持ち続けて、妊娠と流産を繰り返す。戦争での傷がもとで生殖機能を失ってしまっていた李おじさんは、妊娠した田宝珣を連れて台湾へと渡ると、精神を病んだ彼女と生まれたばかりの娘阿瘦を家族として面倒をみる。しかし、田宝珣から李媽媽と呼び名が変わった彼女の放蕩ぐせは「妻 (太太)」や「母 (媽媽)」といった「家庭」の役割によっては抑えることは出来ず、その後も村人たちとの関係性を続け、李おじさんや娘である阿瘦の心を悩ませ続ける。

外島勤務で減多に同方新村に戻ることもない李おじさんに代わって、阿瘦は懸命に気の触れた母親と父親の知れない弟の面倒を見続けるが、阿瘦の目を盗んでは村中を徘徊する李媽媽は出会った村民たちをしばしば訳の分からない恐怖に陥れ、いつしか村中の男性たちから拒絶されるような存在へと変わってゆく。

李媽媽は顔をあげると、例の如く笑ってもいないのに笑っているかのような表情でわたしをジッと見つめたまま、長い間一言も口を利かなかった。その表情はまるで何かを考え込んででもいるかのようだった。

わたしはおそろおそろ尋ねてみた。「もしかして、李念陵を探してきて欲しいの？」

李念陵とは阿瘦の本名だった。すると彼女は、李念陵などといった名前は聞いたことがないといった様子で軽く眉間にシワをよせた。（中略……）彼女はちらりと横目でわたしを眺めると、甘く掠れた声で「ねえ、あなた。わたしを重慶まで連れて行ってくれないかしら」と顔を近づけてきた。

わたしは慌てて彼女の顔から身を引き剥がした。周りには誰もいなかった。陽光が大通りの突き当たりからまっすぐにわたしの足元へ向かって伸びており、それはまるで二人が見えない透明の魔法の絨毯に足をかけているようだった。あるいは、それは本当に重慶まで飛んでゆくことが出来たのかもしれない。

わたしは突然咽喉の渇き覚え、慌てて唇を舌で湿らせた。「ぼく、どうやって行くのか知らないよ」

すると李媽媽は突然、ケラケラと声をたてて笑い出した。「バカね！ 誰かに聞けばいいじゃない。あんたそんなことも出来ないの？」彼女の目がじろりとわたしを睨み付けた<sup>28</sup>。

李媽媽の頭に時間や空間といった概念は欠落している。そのため、抗日戦争の辛勝も国共内戦の惨敗も、そして台湾へと到る流転の日々も、狂気の中にある李媽媽には理解することが出来ない。過去の断片をつなぎ合わせ、ただ現在だけを生きる彼女は、ある意味で眷村とそこに暮らす人々の存在を象徴している。郷愁に満ちた過去に戻ることも出来ず、かといって現在を肯定することも出来ずに浮遊するような感覚の中で日常を送るその様子は、故郷からの離脱を余儀なくされた多くの外省人に共有された感覚でもあったといえる。同方新村の村民たちが彼女を恐れる理由は、自身のそうした姿をその「笑ってもいないのに笑っているような」表情の中に映し取ってしまうせいなのかもしれない<sup>29</sup>。

しかし、李媽媽のこうした生活は後に「外の世界のことをほとんど知ることのない」同方新村に芝居小屋の一団が訪れたことで一変することになる。台湾各地を巡業し、定住の地を持たない芝居小屋の一団は大いに村民たちの関心と注目を集め、村民たちはとりつかれたように芝居小屋へと足を運び始める。芝居小屋のもたらした熱狂は、やがて劇場に足を運ぶ老人たちに「伝染病にでも罹ったかのように笑いが止まらなく」させ、観客たちを「劇中における登場人物の一人とみなし、こっそりと舞台下の観客という役割を演じる」ようにさせ始める。楊翠が指摘するように、同方新村の村民にとって定住の地を持たない芝居小屋の劇団員たちは、「外来者」というよりもむしろ同方新村の村民たちにとって同質的な集団であり、ある意味で村民たち自身の縮図であるともいえる<sup>30</sup>。彼らは鏡を見るようにお互いを観察し合い、やがては演者／観客といった区分さえも曖昧になってゆくのだった。そんな芝居小屋の最も熱心な観客であった李媽媽は、やがて芝居小屋の一団が村から引き上げてゆく際に人知れず彼らについて同方新村を離れてゆく。その際、同方新村を離れた李媽媽は不思議なことに自分が「田宝珣」であった頃の記憶を失い、「全如意」という全くの別人となって新たな人生を歩み始めることとなる。歌が得意であった全如意は、「下手くそな台湾語」であつという間に芝居小屋のスターとして活躍を始め、その容貌も日に日に若かりし頃のそれへと戻ってゆく事となるのだった。

一方、母の突然の失踪を知った阿瘦は八方手を尽くして全如意の存在を突き止め、何とか彼女に母であることを認めさせようとするが、すっかり全如意となってしまった李媽媽は「私を騙しているんでしょう？」と阿瘦の言葉をまるで信じず、「この子、きっと気が狂ってるんだわ。可愛そうに」と、逆に阿瘦に同情してみせ、周囲をひどく困惑させる。戦争で汚された肉体を忘却によって浄化し、まったく別人として変身を遂げた全如意は、こうして徐々に狂気によって失われた青春時代を取り戻してゆく。全如意が田宝珣であるという証明のために阿瘦が提示した写真に映っていた若かりし頃の田宝珣の容姿はもはや完全に全如意のものへと変わり、それを見た周囲の人間は「もともとここまで似てはいなかった。この二年ほどの間、彼女はどんどん若返り、より若い頃に近づいていった」と驚愕の眼差しを彼女に向けつつ、自身の記憶を疑い始める。

記憶を失ったことで全如意の身体は急速に男性の情欲によって汚される以前の少女／処女のものへと回帰してゆく。芝居小屋の団長に突然芝居をやめると告げた全如意は、芝居をやめていったい何をするのかと団長から問われ、「お嫁さんになるの！」と少女のような嬌声を上げる。そして瘋兄さんの父親で、村一番のプレイ・ボーイであった袁忍中との間にかつて肉体関係があったことも忘れ、彼との間に恋愛関係を築きあげようと初心な少女のような眼差しを袁忍中へと投げかけるのだった。戦争によって狂女となった李媽媽は、「全如意」という他者を演じることによって「純潔性」を持った「女」を取り戻すが、そのことは同時にボーヴォワールの「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」といった言葉を喚起させる。狂気の中にあつた李媽媽は芝居小屋の劇団員たちが芝居を演じるように「女」を演じることによって、皮肉にも初めて「正常」な人間として振舞う事が出来たのだ。

しかし、全如意のこうした純情も演じる相手であつた芝居小屋が解散してしまうことで一瞬にして失われてしまう。芝居小屋が解散した後の全如意は、全如意であつた頃の記憶さえも失い、「身分も思想も」失ったまま「ただ静かに117高地を去って」ゆく事となる。もし仮に、全如意の忘却と変身が芝居小屋と同方新村の鏡像関係（相互模倣）の中から生まれたのだとすれば、芝居小屋の解散と全如意の再度の狂気／記憶喪失は、数十年後に「わたし」が目にする事となる同方新村の悲壮な未来を予見したものだといえる。

李媽媽（田宝珣）から全如意への変身とその失敗を見てもわかるように、女性たちの「純潔性」はもはや狂気の中にしか存在せず、しかもその狂気も戦時下における「強姦」という男性の情欲によって生まれたものである。女性たちの「純潔性」というかつて自らが信奉していた神話が男性たちの情欲によって成立していたという逆説は、蘇偉貞がかつて描いてきたような少女たちの「純潔性」が他者の眼差しによって内面化され、情欲を閉じ込めることによって自らの身体を支配と抑圧の場へと作り変えていった結果であつたことを示している。情欲と狂気のディストピアとして描かれた眷村は、女性の身体を幾重にも束縛し、その性（情欲）を身体から切り離すことによってその秩序を保っているといえるが、物語の後半において同方新村の村人たちの間に狂気が急速に感染・拡大してゆくことは、こうした狂気が純潔性の欺瞞性を暴くものであると同時に、純潔性によって成立した眷村の秩序を破壊するものでもあることを示唆しているといえる。

情欲と狂気によって支配されたディストピアとしての同方新村は、かつてそこに暮らす少年・

少女たちが青春とその純愛を謳歌するために創造された致遠新村とは違い、「俗悪な」外部社会との間に築かれた防波堤とも、また眷村内部の「純潔性」を保証する場所にもなりえない。しかし、こうした反ユートピア的な叙述によってこそ、蘇偉貞はかつて「国民党人」であったという自己の「純潔性」に潜んだこうした政治性をあぶり出すことに成功したのだといえる。そして、それはまたかつて「純愛」と「純潔」を基本とした「閩秀作家」として「性」に関わる叙述を「道徳的に」排除してきた蘇偉貞が、「不潔」を排した過剰なまでの「純潔」性の称揚といった「閩秀文学」の抱えるタブーを打ち破った結果であったともいえる<sup>31</sup>。

## おわりに

『同方新村』の結末部分において、村人たちの狂気はまるで作者の手を離れて拡がり続けるような印象を受ける。放蕩癖のやまない眷村一番のプレイ・ボーイ袁忍中は、自分の潔白を疑う妻を燃え盛る暖炉へ突き飛ばして焼死させてしまい、それを目撃して怒り狂った瘋兄さんに火箸で刺殺されてしまう。「全てが狂い始め、場面からは完全にコントロールが失われていった」と語る「わたし」は、「ここに暮らす人間にまともな者はほとんどいない」と知りつつも、それでも同方新村を「故郷」と呼び、数十年の時を経てそこへ回帰することを試みている。「わたし」の「故郷」に対するこうした複雑な思いには、「反共復国」政策の下で想像／創造されてきた大陸の「故郷」を「解嚴」によって一夜にして失ってしまった外省人二世世代の複雑な悲哀が隠されているといえるが、「わたし」が口にするその「故郷」という言葉には、かつて『有縁千里』の少年たちが口にしたような甘い郷愁感といったものは微塵も感じられない。そこから感じられるのは、むしろ「故郷」という言葉が持つ重苦しさや現在の自己との間に広がるある種の緊張関係である。そうした緊張関係の中にこそ、蘇偉貞は「純潔性」という名でこれまで自らの情欲を縛りつけてきた諸々の要因を嗅ぎ取り、情欲や狂気といった概念によって眷村という「故郷」の姿をテキストにおいて再構成しようと試みたのではなかったのだろうか。

## 注

- 1 蘇偉貞の両親に関する詳しい記述は、蘇偉貞「兩地」『歳月的声音』（洪範書店 1992 年）及び蘇偉貞「送行」『租書店的女兒』（印刻 2010 年）などに詳しい。
- 2 施佳瑩『論蘇偉貞小説と戦後台湾文学史建構の關係』（政治大学中国文学系碩士論文 2001 年）123 頁。
- 3 当時のクラスメートによれば、政治作戦学校在学中、蒋介石の逝去を受けて急速クラス内で追悼合唱団が結成された際、合唱団に参加した蘇偉貞は「総統閣下が天で耳を傾けてらっしゃるように感じた」と述べ、その死をひどく悼み悲しんでいたという。姜捷「流螢敢近太陽飛—与蘇偉貞並肩走過的那段歲月」『新月月刊』第 14 期、1984 年 11 月。
- 4 政治作戦学校卒業後は中華民國国軍の中央電視台や国防部芸工隊など、主に宣伝関係の軍職を務め、退役後は専ら執筆活動を行いつつ、「聯合報」副刊や「聯合報」読書人などの編集業も歴任した。また、現在では成功大学中国文学科の教職に就き、張愛玲研究など文学研究者としても活動の幅を広げている。研究者として『猫紅—台湾張派作家世代論』（三民書局 2006 年）などが出版されている。
- 5 また、邱貴芬は 1979 年の美麗島事件によって政治的言説が文学から一時的に減退してゆく中で、男女間にお

- ける情愛の機敏を描いた「閩秀作家」たちの作品がそうしたニッチを埋めていった点を指摘している。邱貴芬「族国建構与当代台湾女性小説的認同政治」『思与言』第三十四卷第三期 1996年9月。他にも当時の文壇において一般的であった人生の意義や国家・民族の前途を鷹揚に謳った作品群の間隙にこそ、「閩秀文学」の存在する余地があったと指摘する研究者もいる。楊照「透過張愛玲看人間一七、八〇年代之台湾小説的浪漫転向」『夢与灰燼』（聯合文学出版社）1998年。また一方、張誦聖は、「閩秀作家」たちが1960年代のモダニズム文学における前衛的技法と1970年代の郷土文学におけるテーマ性（土着的リアリズム）を融合させつつ、そこから逸脱する事によって独特な「唯情主義」とも呼び得る独特の美学を確立していったのではないかと主に作品分析の面から「閩秀作家」たちの作風を分析している。張誦聖「張愛玲与八〇年代台湾女性作家的く張愛玲熱」『中外文学』第二十三卷第八期、1995年1月。
- 6 王徳威「強悍的悲愴—蘇偉貞与『時光隊伍』」『後遺民写作』（麦田出版2007年）301頁。
  - 7 蘇偉貞『紅顔己老』（聯経2001年）4頁。
  - 8 林少雯「作家的第一本書—蘇偉貞『紅顔己老』」『中央日報』（第21版）2000年10月31日。
  - 9 『紅顔己老』は同様の理由から第8回の「聯合報」小説賞を受賞している。
  - 10 王徳威「封閉的島嶼；序論」、蘇偉貞『封閉的島嶼』（麦田出版1996年）8頁。
  - 11 傅素春が指摘するように、蘇偉貞の描くヒロインたちはどれもみな蒼白でありながら聡明であり、とりわけ純潔や純白といった表象を以って女性を描くという手法は蘇偉貞の常套的な叙述手段の一つでもあったといえる。傅素春『旅行理論与理論旅行；蘇偉貞小説的旅行閲読』国立中興大学中国文学系碩士論文、2002年6月、30頁。
  - 12 平子「玲瓏剔透の蘇偉貞」『文学家』第2期、1985年12月。
  - 13 当時大陸から台湾へと流れてきた多くの軍人やその家族たちは、政府当局が唱える「一年準備、二年反攻、三年掃蕩、五年成功」というスローガンの下、眷村での生活を大陸の「故郷」に帰るまでの一時的避難地として見なしていたが、五年が過ぎ、十年が過ぎ、故郷への帰還を諦めざるを得なくなった彼らは、徐々に台湾という異郷の地に根を下ろすことを余儀なくされ始める。そのため、『有縁千里』において二世たちのアイデンティティをめぐる葛藤は決して前面には現れてはこないものの、作品全体を流れる支流となっているといえる。とりわけ、「ここで生まれたわけじゃないが、ここで大きくなったんだ」とつぶやく少年たちの言葉には、反共復国というイデオロギーの下で、大陸の「故郷」を奪還するための橋頭保として位置付けられていた眷村が、二世たちが台湾社会に溶け込み、そこで生きていくための契機であったことが示唆されている。『有縁千里』を主にこうした外省人のアイデンティティ変容の問題を中心に読み解いた研究としては、趙慶華の「相聚、離開、沈黙、流浪—閲読蘇偉貞的『眷村四部曲』」『台湾文学研究』（2007年4月）などが挙げられる。
  - 14 蘇、前掲『有縁千里』8-9頁。
  - 15 デビット・ノッター『純潔の近代 近代家族と親密性の比較社会学』（慶応大学出版2007年）
  - 16 台湾における日本統治時代の「家庭」像や女性の役割に関しては、洪郁如『近代台湾女性史』「新エリート家庭の形成」（頸草書房2001年）が、また中国近代史における「良妻賢母」論の変容に関しては、陳延媛『東アジアの良妻賢母論—創られた伝統』（頸草書房2006年）などに詳しい。
  - 17 江学珠「現在我国女子教育努力的方向」『中華婦女』一卷十期（1951年4月）8頁。
  - 18 王化民「反共抗俄從家庭做起」『中華婦女』二卷三期（1951年11月）1頁。
  - 19 加藤千香子の指摘によれば、「家庭」を女たちの領域とし、「主婦を家庭の総理大臣」として表象するような動きは、日露戦争から第一次大戦にかけての日本の教育界などでも盛んに議論されていたという。そこでは民族の再生装置としての「家庭」とそれを取り仕切る「良妻賢母」が重要視され、規範的女性像としての良妻賢母には「家庭」を善良なものへと変えてゆく国家的役割が期待されていた。加藤千香子『『帝国』日本における規範的女性像の形成—同時代の世界との関係から』、早川紀代、李熒娘他編『東アジアの国民国家形成とジェンダー—女性像をめぐる』（青木書房2007年）
  - 20 『国軍眷村発展史』によれば、婦聯会によって推進された眷村建設運動は1957年の開始から1968年に終了まで10期に渡って続けられ、合計で38,120戸もの官舎が各眷村に建設されることとなったという。国防部史政編纂室『国軍眷村発展史』（史政編纂室2006年）9頁。
  - 21 蘇偉貞『離開同方』（聯経1990年）6-7頁。
  - 22 張大春「曖昧、轆轤的眷村伝記」、蘇、前掲『離開同方』（10）頁。
  - 23 蘇、前掲『離開同方』90-91頁。
  - 24 蘇、前掲『離開同方』112-113頁。
  - 25 蘇、前掲『離開同方』116頁。
  - 26 同様のことは蕭義玲によっても指摘されている。蕭義玲は景心の妊娠行為と同方新村からの出奔を、父権主



---

義的な封建的家族制度からの離脱とそれとの対話の契機として位置づけている。蕭義玲「女性情欲之自主与人格之实现—論蘇偉貞小説中的女性意識」『文学台湾』

- 27 愛亜編『八十年短編小説選』（爾雅 1992 年）173 頁。
- 28 蘇、前掲『離開同方』67-68 頁。
- 29 もうひとつ村民たちが彼女を恐れる理由は、少なからぬ眷村の男性たちが彼女と性的関係を結んでいたためだと思われる。
- 30 楊翠「郷土与記憶—七〇年代以来台湾女性小説的時間意識与空間語境」、2003 年度台湾大学歴史学研究所博士論文。
- 31 「閩秀文学」が持つこうした「純潔性」に対する代表的な批判として、呂正恵「閩秀文学与社会問題」『小説与社会』（1992 年 4 月）などが挙げられる。

